

ジベレリン水溶剤 ジベレリン協和粉末	取扱メーカー： ホクサン、住友化学 原体メーカー： 住友化学
成分： ジベレリン〔ジベレリン剤〕……………3.1%	性状： 白色の顆粒状末で水に投入すると容易に溶け透明な溶液となる。 毒性： 普通物 消防法： ——

【品目特性】……………

●生長促進効果：植物に対する伸長効果は、主として細胞の縦への伸長によってもたらされるが、一部は細胞分裂の促進による場合もあると考えられている。

●開花に対する効果：開花に低温処理や長日条件を必要とする植物では、春化処理が代行され、花芽形成、開花促進が認められる。

●休眠打破、発芽に対する効果：春化が促進され頂芽、枝、花芽、種子、塊茎などの休眠が一般に短縮される。

●単為結果の誘起：種々の植物の単為結果を誘起する。ぶどうの場合には花粉に作用し、雄性不稔をひき起こすことによると考えられている。

●有効成分の特性は参考資料の「有効成分特性一覧表」を参照。

【使用上のポイント】……………

●なるべく晴天の日を選んで処理する。処理後、当日中に降雨があった場合は、その地域の事情の詳しい指導機関に相談のうえ、再処理する。

●本剤処理後しばらくは植物が濡れた状態にある方が効果が高いので、多湿な朝、夕に処理をした方が有利な場合がある。

●使用方法・時期・濃度などを誤らないよう十分に注意する。また、栽培管理などが不十分な不良環境園や異常天候（異常高温、異常低温、異常乾燥など）の時の使用は効果が不十分な場合があるので、十分注意して使用の可否を決定する。

●本剤を使用した植物は場合によっては養分をよ

り多く必要とするので、肥培管理には一層注意する。

●薬液の調製法

下表のように所定の水に溶解すれば、希望濃度の薬液を調製することができる。この場合一時に全量の水に溶かさず、まず少量の水に溶かした後希釈する。

【薬効・薬害等の注意】……………

●薬液は使用の都度調製し、なるべく調製当日に使用する。また調製液はなるべく日陰に置く。

●ボルドー液などアルカリ性薬剤との混用はさける。

●ぶどう

○ぶどうに関する作物名中の品種による区分は、ジベレリンに対するぶどうの反応性の違いを考慮した区分なので、ぶどうの品種がどの区分（品種群）に該当するか、病害虫防除所等関係機関に確認してから使用する。

○下記の「ぶどうの品種による区分」に記載のない品種に対して本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認したうえで使用する。

○ぶどうの品種による区分

・2倍体米国系品種

「マスカット・ベリー A」「アーリースチューベン（バッファロー）」「旅路（紅塩谷）」

・2倍体欧州系品種

「ロザリオ ピアンコ」「ロザキ」「瀬戸ジャイアンツ」「マリオ」「アリス」「イタリア」「紫

濃 度	1000ppm	500 ppm	100 ppm	50 ppm	25 ppm	10 ppm	5 ppm	1 ppm
小スティック1包（ジベレリン50mg含有）当りの水量	50 ml	100 ml	500 ml	1 ℓ	2 ℓ	5 ℓ	10 ℓ	50 ℓ
大スティック1包（ジベレリン200mg含有）当りの水量	200 ml	400 ml	2 ℓ	4 ℓ	8 ℓ	20 ℓ	40 ℓ	200 ℓ

苑」「ルーベルマスカット」「ロザリオ ロッソ」「シャインマスカット」

・3倍体品種

「サマーブラック」「美嶺」「ナガノパープル」「キングデラ」「ハニーシードレス」「BKシードレス」

・巨峰系4倍体品種

「巨峰」「ピオーネ」「安芸クイーン」「翠峰」「サニールージュ」「藤稔」「高妻」「白峰」「ゴルビー」「多摩ゆたか」「紫玉」「黒王」「紅義」「シナノスマイル」「ハイベリー」「オーロラブラック」

(「あづましずく」「ふくしずく」などの巨峰系4倍体シードレス品種は該当しない。)

○降雨や、異常乾燥(フェーン現象などによる異常乾燥)の心配の無い日を選んで処理する。

○処理後の天候急変(降雨、異常乾燥)で本剤の吸収が不十分になるおそれがある場合には、ジベレリンを含む農薬の総使用回数の範囲内で再処理を行うことができる。なお、再処理に当たっては、病虫害防除所等関係機関の指導を受ける。

○本剤は樹勢の弱い樹や登熟の悪い枝などに対しては、効果が不十分なので使用をさける。樹勢がやや強めの方が安定した効果が得られるが、極端に樹勢が強い場合はかえって効果が出ていくので樹勢の管理には十分気をつける。栽培管理については、病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

○本剤の使用により、着粒が安定するとともに果粒の肥大が促進されるので、着粒過多(過密着)による裂果発生のおそれがある。また、果梗が硬化し脱粒しやすくなるので、裂果や脱粒を未然に防ぐため、開花前の整房や着粒後の摘粒などの栽培管理を適切に行う。栽培管理については、病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

○使用時期や使用濃度を誤ると、花振い、着粒過多(過密着)、有核果混入などのおそれがあるので、使用時期、使用濃度は厳守する。

○無種子化を目的とした着粒前の処理の際は、特に丁寧に処理することを心掛け、薬液が花蕾全体に十分行きわたるよう注意する。

○果粒肥大促進を目的とした着粒後の処理の際は、薬液が付きすぎないように、処理後ぶどうの枝やぶどう棚の針金を軽く振って余分な薬液

を落とす。

○本剤をぶどう(2倍体米国系品種)に無種子化・果粒肥大促進の目的で使用する場合は、第2回目処理を浸漬で行う時は100ppmで処理する。また、第2回目処理を散布で行う時は75～100ppm(10a当たり80～100ℓ)で処理する。散布で行う場合は、散布処理は浸漬処理に比べ果粒肥大がやや劣ることがあるので、健全な樹に対して行い、薬液が果房に十分かかるように注意する。

○本剤とストレプトマイシン剤を併用することによって無核果率の向上を図ることができる。使用に当たっては、病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。また、ストレプトマイシン剤の使用上の注意事項を厳守する。

○本剤をぶどう(デラウェア)〔無核栽培〕で使用する場合は、満開予定日約14日前よりも早く処理する時は、花振いすることがあるのでホルクロルフエニユロン剤を加用する。

また、ホルクロルフエニユロン剤を加用して処理する際は、ホルクロルフエニユロン剤の使用上の注意事項を厳守する。

○本剤をぶどうの果房伸長促進の目的で使用する場合は、必ず花房だけを目掛けて花房全体が十分濡れる程度に部分散布する。

この時期に誤って大量の薬液が枝や葉にかかる、その翌年に発芽不良などの新梢の生育障害が起こるおそれがあるので、動力噴霧機やスปีドスプレーなどによる全面散布は行わない。

○ぶどう(あづましずく)に使用する場合は、満開4～13日後の1回処理で十分な効果が得られるが、栽培方法や樹勢等によっては満開時と満開4～13日後の2回処理する必要がある、使用に当たっては病虫害防除所等関係機関の指導を受ける。

○ぶどう(巨峰、ルビーロマン、ハニービーナス)〔有核栽培〕に果粒肥大促進の目的で使用する場合は、早めの処理により無核化率が増加する傾向があるので、有核粒の結実を確認してから処理する。

●かんきつ

〈落果防止〉

○本剤処理により生理落果が軽減され着果が安定するが、品種などにより本剤に対する感受性が異なるので、初めての品種などに使用する場

合は最寄の指導機関の指導を仰ぐか自ら事前に薬効薬害を確認したうえで使用する。

○果面の粗滑や果皮の厚さなど果実品質への影響が懸念される場合があるので、使用時期、濃度は守る。

〈花芽抑制による樹勢の維持〉

○衰弱した樹勢のものに使用しても期待した効果が得られない場合があるので、衰弱した樹には使用しない。

○低温が続いた年（極端な低温の年）又は花芽の減少が予測される裏年の場合は、遅い時期の低濃度処理を心掛ける。

○散布の際は薬液が葉先からしずくとなり落下する程度に散布する。

○ジベレリンの使用濃度を2.5ppmで使用する時は、マシン油乳剤60～80倍液に加用する。

○マシン油乳剤はジベレリンに加用の登録のある剤を使用し、マシン油乳剤の注意書きを確認のうえ使用する。

●温州みかん

〈浮皮軽減〉

○本剤処理により着色が遅延することがあるため、貯蔵期間によって使用濃度を調整する。

使用濃度の目安

・貯蔵用又は樹上完熟の温州みかんでは、概ね3.3～5ppm

・貯蔵しないあるいは貯蔵期間が短い温州みかんでは、概ね1～3.3ppm

○本剤処理により葉斑が残ることがあるため、使用に当たっては病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

〈花芽抑制による樹勢の維持〉

○ジベレリンの使用濃度を2.5ppmで使用する時は、マシン油乳剤60～80倍液又は展着剤に加用する。

○マシン油乳剤又は展着剤はジベレリンに加用の登録のある剤を使用し、マシン油乳剤又は展着剤の注意書きを確認のうえ、使用する。

●ワシントンネーブルの落果防止の目的で使用する場合は次の点に注意する。

○異常に結果歩合の低いものは処理しても効果の上がらないことがある。

○通常効果1果当り小型噴霧器で0.1～0.2ml程度を噴霧する。

●長門ユズキチ（無核）

○長門ユズキチの落果防止及び着果安定の目的で使用する場合は、薬液が花又は幼果から滴り落ちる程度に散布する。

●日向夏

○日向夏の無種子化及び落果防止の目的で使用する場合は、薬液が花又は幼果から滴り落ちる程度に散布する。

●びわ（3倍体）

○本剤処理しないとすべて落果するので必ず処理する。

○樹勢が弱いと果実肥大などの効果が出にくい場合があるので、樹勢は強めに維持する。2回目処理時に1果そうに数果残しておき、果形の良否が判断できる時期に品質の良い果実を残して摘果し、適正着果量をこころがける。

○第1回目の使用時期が早すぎると果梗部のネックが発生しやすく、第2回目の使用時期が遅すぎたり、使用濃度が高い場合は果面の緑斑が残りやすい傾向があるので、使用時期、使用濃度を守る。

●びわ（麗月）

○麗月では他のびわ品種の花粉により受精し有種子果実となるため、無核果実生産を行う場合は、他の品種の花粉による受精を行わないように、開花前から花房への被袋を行う。

○樹勢が弱いと果実肥大等の効果が出にくい場合があるので、樹勢は強めに維持する。2回目処理時に1果そうに数果残しておき、果形の良否が判断できる時期に品質の良い果実を残して摘果し、適正着果量をこころがける。

●かき

○散布時期が早すぎると結実しても果実が小さくなるおそれがあるので、使用時期を誤らない。

○本剤の散布により結実が過多となった場合は果実が小さくなる傾向があるので仕上げ摘果を行ない着果量を調節する。

○散布は幼果及びへたを対象にして十分かかるよう入念に行う。

○品種により本剤に対する感受性が異なるので、下記に記載する品種以外に対して本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認したうえで使用する。（富有、早秋、太秋、新秋、甘秋）

●すもも（貴陽）

- 授粉を行ってから散布する。
- 葉液が付きすぎないように、処理後、枝や柵の針金を軽く振って余分な葉液を落とす。
- 第1回目の処理が早すぎると棘状の枝の発生が見られ、遅すぎると着果安定効果が劣る傾向があるので、所定の使用時期に使用する。
- 本剤の散布により、結実が過多となった場合は、果実が小さくなる傾向があるので、予備摘果と仕上げ摘果を行い着果量を調節する。

●みつば（軟化栽培を除く）

- 葉の表裏に十分散布する。高温長日条件下の散布は抽苔しやすくなるので、秋作を中心に処理した方がよい。

●みつば（軟化栽培）

- 灌水は処理の当日はさけ、翌日に行う。散布により発生茎数が多くなるので根株の伏込みは心持ち加減する。

●トマト

- 落果防止剤を使用した後の本剤の散布は効果が若干劣るので、本剤を先に散布するか、又は混用して使用する。

●セルリー

- 定植後約1ヶ月以内に散布すると「す」が入りやすくなるので使用をさける。なお、スポット散布で使用する場合は1株当たりの使用液量が5～10mlが適量である。

●いちご

〈着果数増加・熟期促進〉

- 処理したいいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出了頃寒波がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意する。
- 本剤の散布適期は、休眠に突入して矮化が始まる直前であり、休眠に入ってからでは効果が期待出来ないで、時期を失わないよう、いちごの生育状況に応じて散布時期を決める。又、第1回目処理後、生育状況をみながら必要に応じて追加処理をする。
- 過剰散布は根の発育抑制やくず果を増加させるので、使用濃度、散布液量を厳守する。

〈果柄の伸長促進〉

- 処理したいいちごの果柄がのび、花、果実が葉の上に出了頃寒波がくると特に寒害を受け易いので防寒に留意する。

●春うど

- 芽及び根株が十分したる程度に散布又は瞬間浸漬する。灌水は処理の当日はさけ、翌日に行う。伏込み後の目土の上からの散布は根株に吸収され難いのでさける。

●ふき

- 収穫間近に散布すると効果が減少するのであるので、使用時期を誤らない。

●畑わさび

- 花芽分化前に処理しても効果が出にくいので、花芽分化開始を確認してから処理する。
- 全面散布は効果が劣るので株の中心部に散布し、効果を高めるため必ず2回処理する。気温が5℃以下では効果が劣るので11月上旬からビニールなどで被覆し、保温管理する。また、15℃以上になると花芽分化が抑制されるので、15℃以上にならないよう温度管理には十分注意する。

●たらのき

- 散布は散布ムラがないよう噴口の小さい散布器を用いて入念に行う。
- 葉液が芽に均一にかかるよう、駒木の高さと芽の向きを揃えておく。

●ばれいしょ

- 種いも切断後の処理は葉害を生じるおそれがあるのでさけ、必ず種いもを切断せずに処理する。
- 浸漬時間が長くなったり、高濃度液に浸漬すると葉害を生じるおそれがあるので所定の浸漬時間及び使用濃度を厳守する。
- 薬剤処理した種いもは長時間ぬれたままにしておくと発芽遅延等の葉害を生じるので、風通しのよい場所ですみやかに乾燥させる。
- 種いもを切断する場合は処理した葉液が十分乾いてから行う。
- 品種により本剤に対する感受性が異なるので、本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び葉害を確認した上で使用する。

●種いも用ばれいしょ

- 本剤は種いも生産用として原採種圃に植え付ける種いもに用いるものである。
- 種いも切断後の処理は葉害を生じるおそれがあるのでさけ、必ず種いもを切断せずに処理する。

○浸漬時間が長くなったり、高濃度液に浸漬すると薬害を生じるおそれがあるので所定の浸漬時間及び使用濃度を厳守する。

○薬剤処理した種いもは長時間ぬれたままにしておくと発芽遅延等の薬害を生じるので、風通しのよい場所ですみやかに乾燥させる。

○種いもを切断する場合は処理した薬液が十分乾いてから行う。

○薬剤処理した種いも及びその収穫物は食料又は飼料には使用しない。

○品種により本剤に対する感受性が異なるので、本剤を初めて使用する場合は、病害虫防除所等関係機関の指導を受けるか、自ら事前に薬効及び薬害を確認したうえで使用する。

●花き

○処理濃度、量、回数は必要最小限にとどめ、徒長や軟弱化を防ぐため栽培管理に十分注意する。処理の際には花蕾のある中心部めがけて噴射する。

○てっぽうゆり

イ、球根の低温処理は8～13℃ 7週間とするが、本剤によって発芽が早まる場合があるので、発芽状態を見ながら発芽が始まれば、7週間が経過してなくとも出庫する。

ロ、本剤処理によって休眠が打破され発芽率が向上するが、発根は抑制される。従って定植時期が高温の場合は根の発育が悪くなり、その結果切花重量の減少などの障害を受けやすい。この高温障害防止策として次の処理をすることが望ましい。

- ・球根は100 g以上の大球を用いる。
- ・定植時よじや寒冷紗の被覆などによって温度を下げるような管理をする。
- ・生育初期に2～3回尿素などの葉面散布剤の散布を行う。

ハ、従来の温湯処理によって根ダニの発生を同時に抑えていたところでは、本剤の処理によっては根ダニの抑制効果はないので、殺ダニ剤などの利用によって発生を防止するよう留意する必要がある。

○さつき

さつきの未開花苗に使用する場合は、茎の伸長状況を見ながら対象品種の成木の開花時期を参考にして、使用時期を決める。

○りんどう

イ、処理は葉が十分濡れる程度に散布する。

ロ、使用時期の定植直前は苗姿3～4対葉期を目安にする。

ハ、切株散布する場合は、翌年の萌芽に影響を与えないよう散布後は生育期間を十分に確保する。

○ソリダゴ

イ、高温期の処理では効果を示さないので、低温期（11～3月頃）に処理する。

ロ、処理により草丈及び切り花重がやや低下することがある。

○さくら（切り枝促成栽培）

休眠が深い時期の処理は効果が出にくいので、自発休眠の浅い時期に処理する。

●すぎ及びひのき科の採種木

○散布量は葉が十分濡れる程度とし、特にその年に伸びた枝には丁寧に散布する（3～4 mの採種木1本当たり300～400 ml程度）。

○6月頃に処理すると雄花が多くなり、8月に処理すると雌花が多くなる傾向があるので、雄花・雌花の両方をつけるには、すぎでは7月に2～3回、ひのきについては、4～5回散布するのが適当である。

○同一の木に連年処理すると樹勢が衰える場合があるので十分留意し、樹勢が衰えるようであれば隔年処理を行う。

○他剤との混用及び近接散布は効果がおちることがあるので行わない。

○樹高が高く葉面散布が困難な場合は、樹幹基部剥皮挿入法で処理する。処理の時期は7月初め頃が適当である。処理は樹幹基部3カ所に幅約1～2 cmの辺材部に達する傷をつけ、形成層の内側で木部に多少かかるように剥皮し、所定量の本剤粉末を挿入して、剥皮した樹皮でふたをし、ビニールテープ等でしばっておく。なお、使用量は樹の大きさに応じて適宜加減する。

○使用に当っては林業関係技術者の指導を受ける。

●共通注意事項8、適用作物群に関する注意事項を参照。

【安全使用上の注意】……………

●本剤は眼に対して刺激性があるので眼に入らないよう注意する。眼に入った場合には直ちに水洗し、眼科医の手当を受ける。使用後は洗眼する。

●使用の際は農薬用マスクなどを着用する。作業後はうがいをする。

●浸漬処理に使用する際は不浸透性手袋などを着用する。



【適用と使用法】

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン ppm)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の 総使用回数
ぶ ど う (ヒムロッド シードレス を除く2倍体 米国系品種) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大 促進	満開予定日 約14日前(第1 回目)及び 満開約10日後 (第2回目)	第1回目 100ppm 第2回目 75～100ppm	果房散布の 場合は30～ 100ℓ	第1回目：花房 浸漬 第2回目：果房 浸漬又は果房散 布	2回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計4回 以内	2回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計4回 以内
ぶ ど う (ヒムロッド シードレス)	果粒肥大 促進	着粒後	100ppm	—	果房浸漬	1回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計2回 以内	1回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計2回 以内
ぶ ど う (大粒系デラ ウェア) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大 促進	展葉7～8枚時	200ppm	—	花房浸漬 (ホルクロ ルフェニユロ ン5～10ppm 液 に加用)	1回	1回
ぶ ど う (デラウェア) [無核栽培]		満開予定日 約14日前(第1 回目)及び 満開約10日後 (第2回目)	第1回目 100ppm 第2回目 75～100ppm	果房散布の 場合は30～ 100ℓ	第1回目：花房 浸漬 第2回目：果房 浸漬又は果房散 布	2回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計4回 以内	2回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計4回 以内
		満開予定日 18～14日前(第 1回目)及び 満開約10日後 (第2回目)	第1回目 100ppm 第2回目 75～100ppm		第1回目：花房 浸漬(ホルクロ ルフェニユロン 1～5ppm 液に 加用) 第2回目：果房 浸漬又は果房散 布		
ぶ ど う (キャンベル アーリーを 除く2倍体 米国系品種) [有核栽培]	果粒肥大 促進	満開10～15日 後	50ppm	—	果房浸漬	1回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計2回 以内	1回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計2回 以内
ぶ ど う (キャンベル アーリー) [有核栽培]	果房伸長 促進	満開予定日 約20～30日前 (展葉3～5枚時)	3～5ppm	30～100ℓ	花房散布	1回	2回以内、 但し降雨 等により 再処理を 行う場合 は合計3 回以内

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン ppm)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の 総使用回数
ぶ ど う (2 倍体欧州 系品種) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大 促進	満開時～満開 3日後(第1回目) 及び満開10～ 15日後(第2回 目)	第 1 回目 25ppm, 第 2 回目 25ppm	—	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬	2回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計4回 以内	3回以内、 但し降雨 等により 再処理を 行う場合 は合計5 回以内
		満開3～5日後 (落花期)	25ppm		花房浸漬 (ホルクロル フェニユロン 10ppm 液に 加用)	1回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計2回 以内	
	果房伸長 促進	展葉3～5枚時	3～5ppm	30～100 ℓ	花房散布	1 回	
ぶ ど う (ヒロハンプ ブルグを除く2 倍体欧州系 品種) [有核栽培]	果粒肥大 促進	満開10～20日 後	25ppm	—	果房浸漬	1回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計2回 以内	1回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計2回 以内
ぶ ど う (ヒロハンプ ブルグ) [有核栽培]		満開10～15日 後	50～100ppm	果房散布の 場合は70～ 80 ℓ	果房浸漬又は 果房散布		
ぶ ど う (キングデラ, ハニーシードレス, BKシードレスを 除く3倍体品種)	果房伸長 促進	展葉3～5枚時	3～5ppm	30～100 ℓ	花房散布	1 回	3回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計5回 以内
ぶ ど う (BK シードレス)	着粒安定 果粒肥大 促進	満開時～満開3 日後(第1回目) 及び 満開10～15日 後(第2回目)	第1回目 25～50ppm 第2回目 25～50ppm 第1回目 25～50ppm 第2回目 25～50ppm	—	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬	2回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計4回 以内	
		満開3～6日後	100ppm		花房又は果房 浸漬	1回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計2回 以内	2回以内、 但し降雨 等により 再処理を 行う場合 は合計4 回以内
ぶ ど う (キングデラ)		満開時～満開 3日後(第1回目) 及び 満開10～15日 後(第2回目)	第1回目 50ppm 第2回目 50～100ppm	果房散布の 場合は50～ 100 ℓ	第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬 又は果房散布	2回	2回

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン ppm)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の 総使用回数
ぶ ど う (ハニーシー ドレス)	着粒安定 果粒肥大 促進	満開3～6日後	100ppm	—	花房又は果房 浸漬	1回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計2回 以内	1回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計2回 以内
ぶ ど う (サニールー ジュを除く巨 峰系4倍体品 種) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大 促進	満開時～満開 3日後(第1回目) 及び 満開10～15日 後(第2回目)	第1回目 12.5～25ppm 第2回目 25ppm		第1回目：花房浸漬 第2回目：果房浸漬	2回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計4回 以内	3回以内、 但し降雨 等により 再処理を 行う場合 は合計5 回以内
		満開3～5日後 (落花期)	25ppm		花房浸漬 (ホルクロル フェニユロン 10ppm 液に 加用)	1回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計2回 以内	
	無種子化	満開時～満開 3日後	12.5～ 25ppm		花房浸漬 (満開10～15 日後にホルク ロルフェニユ ロンによる果 粒肥大促進処 理を行うこと)	合計2回 以内	
	果房伸長 促進	展葉3～5枚時	3～5ppm	30～100 ℓ	花房散布	1回	

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン ppm)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の 総使用回数
ぶどう (サニールー ジュ) [無核栽培]	無種子化 果粒肥大 促進	満開時～満開 3日後(第1回目) 及び 満開10～15日 後(第2回目)	第1回目 12.5～25ppm 第2回目 25ppm	—	第1回目：花房 浸漬 第2回 目：果房浸漬	2回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計4回 以内	3回以内、 但し降雨 等により 再処理を 行う場合 は合計5 回以内
		満開3～5日後 (落花期)	25ppm		花房浸漬 (ホ ルクロルフエ ニユロン 10ppm 液に加 用)	1回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計2回 以内	
	無種子化	満開時～ 満開3日後	12.5～ 25ppm		花房浸漬 (満 開10～15日 後にホルクロ ルフエニユロ ンによる果粒 肥大促進処理 を行うこと)	1回	
	果房伸長 促進	展葉3～5枚時	3～5ppm	30～100 ℓ	花房散布	1回	
	着粒密度 低減 果粒肥大 促進	満開予定日 14～20日前 (第1回目)及び 満開10～15日 後(第2回目)	第1回目 25ppm 第2回目 25ppm	—	第1回目：花房浸漬 (ホルクロルフエニ ユロン3ppm液に加用) 第2回目：果房浸漬	2回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計4回 以内	
ぶどう (巨峰) [有核栽培] ぶどう (ルビーロマン) [有核栽培] ぶどう (ハニービーナス) [有核栽培]	果粒肥大 促進	満開10～20日 後	25ppm		果房浸漬	1回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計2回 以内	1回、但 し降雨等 により再 処理を行 う場合は 合計2回 以内
ぶどう (高尾) ぶどう (ふくしずく)		満開時～満開 7日後	50～100ppm		花房又は果房 浸漬		
ぶどう (あづましずく)		満開時(第1回 目)満開4～13 日後(第2回目)	第1回目 25～50ppm, 第2回目 50ppm		果房浸漬	2回以内、 但し降雨 等により 再処理を 行う場合 は合計4 回以内	

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン ppm)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の 総使用回数
か ん き つ (苗木, 但し 温州みかん を除く)	花芽抑制 による樹 勢の維持 落果防止	12～3月	25～50ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布	1回	1回
か ん き つ (不知火, ぼんかん, かばす, はるみ, ワシントンネーブル, 日向夏, すだち, 平兵衛酢, 長門ユズキチ(無核), 温州みかん, ぎんかんを除く)		収穫後～3月	2.5ppm	200～700 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60～80倍液に 加用)		
		収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	25～50ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
		開花始め～ 満開10日後		50～100 ℓ	散布		
不 知 火 は る み	花芽抑制 による樹 勢の維持	収穫後～3月	2.5ppm	200～700 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60～80倍液 に加用)	1回	3回以内
		収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	25～50ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
	落果防止	開花始め～ 満開10日後		50～100 ℓ	散布		
	水腐れ軽減	着色終期 但し, 収穫7日 前まで	0.5～1ppm	50～500 ℓ	果実散布		
ぼ ん か ん	花芽抑制 による樹 勢の維持	収穫後～3月	2.5ppm	200～700 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60～80倍液に 加用)	1回	1回
		収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	25～50ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
	落果防止	開花始め～ 満開10日後		50～100 ℓ	散布		
	水腐れ軽減	着色始期～4分 着色期 但し, 収穫21日前 まで	0.5ppm	50～500 ℓ	果実散布		
長門ユズキチ (無核)	花芽抑制 による樹 勢の維持	収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	25～50ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
	落果防止	開花始め～ 満開10日後		50～100 ℓ	散布		
	着果安定	開花期～ 開花終期	50ppm		花又は果実 散布		
	果皮の緑 色維持	収穫予定 14～30日前	10～25ppm	50～400 ℓ	果実散布		

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン ppm)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の 総使用回数
す だ ち	花芽抑制 による樹 勢の維持	収穫直後～ 収穫約 1 カ月後	25～50ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布	1 回	1 回
	落果防止	開花始め～ 満開 10 日後		50～100 ℓ	散布		
	果皮の緑 色維持	収穫予定 7～30 日前	5～25ppm	50～400 ℓ	果実散布		
平 兵 衛 酢 か ぼ す	花芽抑制 による樹 勢の維持	収穫直後～ 収穫約 1 カ月後	25～50ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
	落果防止	開花始め～ 満開 10 日後		50～100 ℓ	散布		
	果皮の緑 色維持	収穫予定 14～30 日前	10～25ppm	50～400 ℓ	果実散布		
ワシントンネーブル	花芽抑制 による樹 勢の維持	収穫後～3 月	2.5ppm	200～700 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60～80 倍液に 加用)		
		収穫直後～ 収穫約 1 カ月後	25～50ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
	落果防止	満開 10～20 日 後の幼果期	500ppm	30～40 ℓ	幼果に散布		
日 向 夏	花芽抑制 による樹 勢の維持	収穫後～3 月	2.5ppm	200～700 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60～80 倍液に 加用)		
		収穫直後～ 収穫約 1 カ月後	25～50ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
	無種子化, 落果防止	満開 7～10 日 後	300～ 500ppm	30～40 ℓ	果実散布		
温州みかん (苗木)	花芽抑制 による樹 勢の維持	11～1 月	25～50ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
			10ppm		立木全面散布 又は枝別散 布 (プロヒド ロジャスモン 1000～2000 倍液に加用)		
			2.5ppm	200～700 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60～80 倍液 又は展着剤に 加用)		

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン ppm)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の 総使用回数
温州みかん	花芽抑制 による樹 勢の維持	11～1月 但し、収穫後	2.5ppm	200～700 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60～80倍液 又は展着剤に 加用)	1回	3回以内
		収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	25～50ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
			10ppm		立木全面散布 又は枝別散布 (プロヒドロ ジャスモン 1000～2000 倍液に加用)		
	落果防止	開花始め～ 満開10日後	10ppm	50～100 ℓ	散布 (プロヒドロ ジャスモン 1000～2000 倍液に加用)		
			25～50ppm		散布		
	浮皮軽減	収穫予定日の3 ヵ月前 但し、収穫45 日前まで	1～5ppm	100～400 ℓ	果実散布 (プロヒドロ ジャスモン 1000～2000 倍液に加用)		
きんかん	花芽抑制 による樹 勢の維持	収穫後～3月	2.5ppm	200～700 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布 (マシン油乳剤 60～80倍液に 加用)	1回	1回
		収穫直後～ 収穫約1ヵ月後	25～50ppm	50～250 ℓ	立木全面散布 又は枝別散布		
	落果防止	開花始め～ 満開10日後			散布		
	着果安定	一番花開花期	300ppm	30～60 ℓ	花に散布		
びわ (3倍体)	着果安定, 果実肥大 促進	満開予定日 約7日前～満開 時(第1回目) 及び第1回目処 理後35～60日 (第2回目)	第1回目 200ppm 第2回目 200ppm	—	ホルクロルフェニ ュロン20ppm 液に 加用, 第1回目:花房浸漬 第2回目:果房浸漬	2回	2回
びわ (麗月)				25～40 ℓ	ホルクロルフェニ ュロン20ppm 液に 加用, 第1回目:花房散布 第2回目:果房散布		
すもも (貴陽)				20～50 ℓ	果実散布		
かき	落果防止	満開10日後	50～200ppm	30～100 ℓ	幼果及び へたに散布	1回	1回

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン ppm)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の 総使用回数
ア セ ロ ラ	着粒安定	開花期	25ppm	100～400 ℓ	花に散布	1花当り 1回	1花そう 当り3回 以内
野 菜 類	発芽促進	は種前	50～200ppm	—	種子浸漬	1回	1回
み つ ば (軟化栽培を 除く)	生育促進	本葉2～3枚時 (第1回目)と その2週間後(第 2回目)但し、 収穫14日前 まで	10ppm	50～100 ℓ	葉面散布	2回	3回以内 (種子へ の処理は 1回以内、 は種後は 2回以内)
み つ ば (軟化栽培)		根株伏込時	20～50ppm		根株上面に 散布	1回	2回以内 (種子へ の処理は 1回以内、 根株伏込 時は1回 以内)
ト マ ト	空どう果 防止	開花時	10ppm	1花房当り 5mℓ	花房散布 (トマト落果防 止剤と併用)	1花房当 り1回	種子への 処理は1 回, 1花 房当り1 回
な す	着果数増 加	開花時	10～50ppm	100～150 ℓ	葉面散布	1回	2回以内 (種子へ の処理は 1回以内、 は種後は 1回以内)
さやいんげん (矮性(促成又は 半促成栽培))	節間伸長 促進	本葉0.5～ 1.5枚展開時	5ppm	1株当り2mℓ	茎頂部散布	2回以内	3回以内 (種子へ の処理は 1回以内、 は種後は 2回以内)
し そ (花穂)	穂の伸長 促進 花径の伸 長促進	出穂期 但し、 収穫5日前まで		50 ℓ	茎葉散布		
い ち ご (促成栽培)	着果数増 加 熟期促進	休眠に入る直前 (冬場の低温期)	10ppm	1株当り5mℓ	茎葉全面散布	1株当り 6回以内	1株当り 10回以内
い ち ご	果柄の伸 長促進	頂花の出蕾直後 ～開花直前			株の中心部に 散布	1花房 当り1回	
い ち ご (親株床)	ランナー 発生促進	採苗時ランナー 発生直前～ 発生初期	50ppm	1株当り 10mℓ	茎葉散布	1株当り 1回	1株当り 1回
メ ロ ン	着果促進	開花前日～翌日	200ppm	1花当り 2～5mℓ	散布 (4-CPA 剤50 倍液に加用)	1花当り 1回	種子への 処理は1 回, 1花 当り1回

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン ppm)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の 総使用回数	
うど (春うど)	休眠打破 による生 育促進	伏込時	50ppm	1株当り 20 ～25 ml	根株散布	1回	1回	
			50～100ppm	—	根株浸漬			
たらのき (促成栽培)	萌芽促進		葉数3～4枚時 (草丈10～30 cm頃)	50ppm	100～200 ml /m ²			駒木散布
ふき	生育促進	25ppm		50～300 l	全面散布			
セルリー	生育促進 肥大促進	収穫予定 7～20日前	50～100ppm	20～200 l /10a	葉面散布	2回	2回以内 (種子への 処理は 1回以内、 は種後は 1回以内)	
畑わさび	花茎の抽出時期促進 及び発生量増加	花芽分化後の10 月下旬(第1回 目)及び第1回 目処理後約10日 後の11月上旬 (第2回目)但し、 収穫60日前まで	第1回目 100ppm 第2回目 100ppm	1株当り 2 ml	株の中心部に 散布		3回以内 (種子への 処理は 1回以内、 は種後は 2回以内)	
ばれいしょ	休眠打破 による萌芽促進 及び小粒いもの増収	植付前	5～10ppm	—	30秒間 種いも浸漬	1回	1回	
				250～300 ml / 種いも 10kg	種いも散布			
種いも用ばれいしょ	休眠打破 による萌芽促進 及び全粒種いもの増収			—	250～300 ml / 種いも 10kg			30秒間 種いも浸漬
								種いも散布
花き類 (りんどうを除く)	発芽促進	は種前	50～200ppm	—	種子浸漬	1回	2回以内 (種子への 処理は 1回以内、 は種後は 1回以内)	
りんどう	発芽促進				種子浸漬			
	生育促進	定植直前又は定植1～5週間後	100ppm	50～150 l	茎葉散布			
		収穫後		1株当り 5～10 ml	切株散布			
植付時		50ppm	—	球根浸漬	2回以内			
花茎伸長期			50～150 l	茎葉散布				
トルコギキョウ		生育期間中にロゼット化した時	50～100ppm		30～40 l	1回		
ソリダゴ		活着直後 又は萌芽期	25ppm	1株当り 1 ml				
アイリス	植付時	50～100ppm	—	球根浸漬				

作物名	使用目的	使用時期	使用濃度 (ジベレリン ppm)	10 a 当り 使用液量	使用方法	本剤の 使用回数	ジベレリンを 含む農薬の 総使用回数
シクラメン	開花促進	9月中・下旬	1～5ppm	1株当り 2～5㎖	花蕾を含む 芽の中心部に 散布	1回	1回
プリムラ (マラコイデス)		11月上旬頃の花蕾出現直後	10～20ppm		株の中心部に 散布		
スパティフィラム		出荷予定期の 2～3カ月前	250～ 500ppm	30～40ℓ	茎葉散布		
アザレア		開花予定日 約1カ月前					
みやこわすれ	開花促進 草丈伸長	1月中旬の保温 開始時から 7～10日間隔	50～100ppm	1株当り 10 ～15㎖	葉面散布	3回	3回以内
きく	促進	生育期	25～100ppm	50～100ℓ	茎葉散布	2回以内	2回以内
しらん		植付時	50ppm	—	30分間株浸漬	1回	1回
てっぼうゆり (促成栽培)	休眠打破	低温処理前	1000ppm		30秒間 球根浸漬		
さつき (施設栽培苗)	茎の伸長 促進 花芽分化 の抑制	茎の伸長初期～ 伸長終期（開花 盛期以降）1～ 2週間間隔	100～ 200ppm	50～100ℓ	頂芽に 十分散布	3回	3回以内
さくら (切り枝促成栽培)	休眠打破 による生 育促進	休眠期	25～50ppm	50～200ℓ	切り枝 全面散布	1回	1回
				—	切り枝浸漬		
すぎ (採種樹)	花芽分化 促進	6～8月頃の花 芽分化期	100ppm	1樹当り 300 ～400㎖	葉面散布	3回以内	3回以内
		7月上中旬の花 芽分化期	胸高径5cmの 樹1本当り 100mg	—	樹幹基部剥皮 挿入	1回	
ひのき科 (採種樹)		6～8月頃の花芽 分化期	200ppm	1樹当り 300 ～400㎖	葉面散布	4～5回	5回以内